
白志摩学園生徒会！！

西夏樹峽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白志摩学園生徒会！！

【Nコード】

N9677L

【作者名】

西夏樹峡

【あらすじ】

私立白志摩学園生徒会。それは学園最大の権力を握る一般生徒の集まりである。

そんな生徒会のはちゃめちゃ？ な学園生活をご堪能あれ

生徒会発足！！

プロローグ 生徒会の仕組み

私立白志摩学園。

中等部と高等部に分かれたその学園は大学に入学手続きをすればフリーパス同然の扱いを受け、会社へ就職しようとすれば内定確定を誇る、名門中の名門。

現在生徒数、中等部一学年二百四十人、全学年では七百二十人。高等部一学年二百八十人。全学年では八百四十人。全校生徒千五百六十人。

私立だというのは名ばかりで学費は近隣の公立学校とほぼ同じ。そのくせ、設備は国の中枢も顔を真つ青にして驚くほどの最新式スーパーコンピューターや、全校生徒に配布される一人一台のパソコンなど、どこからそんな金が出てくるというほどの贅沢さ。

学校に入学している生徒は学力・性格・運動能力はいわずともがな私生活までもがきっちりしている生徒ばかりで、近隣学校の生徒からは貴族の通う学園として有名である。

そんな私立白志摩学園にも生徒会という組織が存在する。

一般的に言う生徒会とは全校生徒の代表者であり、全学年からの立候補者から選挙で選ぶいわば学校の顔で、学校運営の手助けをする生徒の代表が集まった組織である。

仕事の内容はさまざまで、例えば図書委員や美化委員、風紀委員などといった委員会をまとめることであつたり、生徒の要望を聞き、出来るだけそれを実行するという学校がほとんどだろう。

だが白志摩学園の生徒会は一時違う。

まず、生徒会の役員構成だが、中等部、高等部で一学年につき一人の役員を選出することになる。役職は学年など関係なしに立候補で決まってい

役職は生徒会長が一人。副会長が二人。書記、会計も一人。それら五人に加え、執行員という委員会を牛耳り命令する存在がある。権力的には会長が一番上。そのほかの役員は同じだが、役員たちの中では副会長の一人である生徒会長補佐が一番偉いのではないかという考えが多い。

副会長のうち一人は生徒会長補佐、もう一人は執行員とほぼ同じ。書記や会計は言わなくてもいいと思うが、一応。書記はあらゆることを記録する役職。会計は金銭の管理が主となる。

そして、生徒会長だが、はっきり言ってこの学園において、生徒会長に仕事は無い。集会などで挨拶をすることはあっても、原稿は副会長が考えたものなので会長は何もしていない。本当は問題を起こした生徒などの更生などがあるのだが、この学園で問題を起こす生徒はまずいない。いたとしてもほとんど何もしていないのに勝手に起こったみたいなきもちなので更生もくそもない。ということでは生徒会長に仕事は無い。

次に説明することが重要なのだが、この学園における生徒会の権力は一般教師も恐れるほどだ。まず、会長以外の役員には一般教師と同等、またはそれ以上の権力があたえられる。生徒会長には学園長と同等、またはそれ以上の権力が与えられるため、会長が『校庭に十分以内に集合』と言えば、そうせざるをえない。学食のメニューを増やしたり減らしたりすることも可能だ。

だが、こんな待遇のいい白志摩学園生徒会は毎年立候補者が出ずに困ってしまい、最終的には昨年度の生徒会役員がうんといわざるをえなくなってしまうのだ。だから新中一や高校からの編入生は気をつけなければならない。

その理由に生徒会の雑務などの多さが問題となる。基本的に一般の学校では生徒会といえば教師などの学校運営の補佐

だが、この学園では教師は学校運営にほとんど関わらず、運営にかかわるほぼすべての事項が生徒会に任される。そのために一年生で生徒会に入ってしまったものはまず部活動は出来ないだろうし、休日も四分の一ほどがつぶれてしまう。夏休みも平日はほぼ毎日登校を強制される。

これらのことから生徒会の権力がなぜ強いかがよく分かると思う
以上に述べたことを考慮し物語を読み進んでいってほしい。

第一章 会長と会長補佐

ものすごく勉強をして入った私立白鳥学園で僕を待っていたのは地獄の日々だった。

一年の初め、何も知らずに何気なく立候補した生徒会で待っていたのは本当に地獄だった。休日はほぼ返上で学校に登校し、長期休暇でも三分の二くらいは登校した。入りたかったクラブにも入れず、二年になったらやめようと誓っていた。

二年になって、今度こそ入らないと思っていたのに、名前も知らないやつに推薦され、また生徒会に入った。そして、次こそは絶対に入らないと決めた。

今現在の学年である中等部三年になって、絶対に入らないと誓っていた生徒会にまたも推薦され入った。断固拒否したのに、最終的には学年全体が僕の敵になった。

そして、今にいたる。生徒会役員を決めるための学年集会が開かれたのが始業式から二週間たったあとで、いまは始業式が終わり約三週間、正確には二十日たち、全学年の役員が決まって、今日が新

年度始めての生徒会役員会議である。今日の会議で役職を決め、明日から学校運営を開始する。

僕は去年とほぼ同じメンバーの役員を見て一つため息を付くと言った。

「役員は全員集まりましたか？」

僕の問いには真向かいにいた新高等部二年の赤羽香先輩が答えた。「いえ、まだ高等部の一年代表がまだよ」

彼女は中等部一年の頃から生徒会役員で昨年度は生徒会の会計を担当していた。赤みがかった短い髪とドSな性格がチャームポイントのはつきり言って去年の生徒会で一番怖かった人。

「遅いな。集合時間はとくに過ぎているはずなんだが」

「そうですね。放送で呼び出しましょうか？」

先に口を開いたのが新高等部三年の山口良先輩。山口先輩も中等部一年のころから生徒会をやっていて、去年は執行員をしていた。体つきは筋肉がちがちの体育会系。生徒会に入らなかったら筋肉部とか言う変なクラブに入るつもりだったそうだ。顔はよく言うが強面。悪く言うと強面といわれるくらいの強面で、過去に山口先輩にいちやもんをつけたヤの付く自由業の方が先輩の顔を見るなり財布を置いて逃げたという伝説が残っているほどだ。

あとから口を開いたのは新中等部二年で去年は生徒会書記をやっていた矢口京。小さい顔と小さい体。そのくせ体育が好きで、暴力的。長く黒い髪をポニーテールにした京美人。年下で身長も低いはずなのに大人っぽさを感じる雰囲気圧倒される。

「あと、五分待つてこなかったら放送で呼び出しましょう」

僕がそういつて四分と四十二秒後どたとという音と共に高等部一年代表の先輩が息を切らし、生徒会室のドアを開けた。

「遅れてすいません！」

やってきたのは去年の生徒会にいた先輩ではなく、はつきり言っ

て一度も見たことの無い人だった。

もしかしたら見たことがあって、でも気にならないくらいに平凡な顔なんかじゃない。

その先輩は一度見たら忘れられない、それほどまでの美少女だった。

身長は高く、全国平均と真ん中の身長を誇る僕よりも高そうだ。見たところ体重もそれほどではないだろう。セミロングで黒の髪の毛、ピンクの唇。白い肌、零れ落ちそうな黒い瞳。高く整った鼻。あえて残念なところをいうなればバストが小さめな所ぐらいだ。体全体を言葉で表すとキュツ・キュツ・ボンといったところか。

とにかくその先輩が入ってきた。

「集合時間はとくに過ぎているぞ。何をしていた」

これほどの美少女を目の前にしても、山口先輩は動じていない。

「すみません。部活してました。というか、さっきまで生徒会に入っているということを知りませんでした」

『はあ？』

一同が声をそろえて疑問符を口にした」

「いえ、学年集会の時に寝てたら知らない間になっていました。友達の話によると時江くんがどうしても嫌がったそう。そこで私が手を上げたらしいんですが、すみません何も覚えてないです」

時江くんとは去年の生徒会で副会長をしていた先輩のことだ。

「あつ、部活はやめてきました。生徒会は忙しいらしいので。自分が生徒会に入っていることを知った、三分後には退部届け出しました」

いや、そこまでしなくても。

「そう。じゃあ、とりあえず座って。これからすぐに新年度第一回生徒会役員会議をするわ」

「はい」

そう返事をする先輩はあいていた僕の隣の席に座った。座る時にこれからよろしくと耳元でささやかれたのには心底ドキツとした。

「じゃあ、とりあえず、これから一年間よろしく」

全員がよろしくと軽く頭を下げる。

「第一回生徒会役員会議を始めます。役職はまだ決まっていらないから、今日の会議で書記に決まった人は会議の内容を専用ノートに書いておいて。議題は生徒会の役職についてです」

赤羽先輩が全体を取り仕切る。赤羽先輩が言葉を発する時にみんなが黙るのはきつとその怖さを知っているからだろう。

「おいおい、赤羽。自己紹介もしていないのに役職もくそも無いだろう。とりあえず、名前とクラス、番号に特技とか趣味とかを教えてください」

山口先輩が赤羽先輩をなだめる。

「そうですね。じゃあ、新中等部一年のあなたから。名前、クラス、番号、特技と希望する役職を教えてください」

赤羽先輩も山口先輩には逆らえないようだ。

「……鏡優。中等部一年C組十番。特技、パソコン。希望する役職、会計」

新一年の鏡くんは無愛想で、どうも恥ずかしがりらしく、挨拶をしたあとはずっと下を向き顔を赤くしていた。

「じゃあ、次」

赤羽先輩が先を促す。

「去年から生徒会をやっていますが、一応。……中等部二年D組四十番、矢口京です。特技はバック転が出来ることとマラソンです。希望する役職は、書記で」

次はついに僕だが、出来るだけ愛想良くしたほうがいいのだろうか。

「じゃあ、今度は不意打ちで高等部の一年から行ってみよう。……」

お前最後な」

「んなっ！」

まさかの！ プレッシャー半端なくね！

「じゃあ、どうぞ」

まさか、僕を抜かすとは。二年も同じ生徒会をやっているが、山口先輩の行動は予想も出来ない。

「えーと、じゃあ。……五月雨時雨といいます。高等部一年B組で、番号は三十一番です。えー、特技は合気道で、希望する役職は特にありません。与えられた仕事はちゃんとこなします」

五月雨時雨とは変わった名前である。しかし、美人だ。美しい。

「次は私ね。名前は知っていると置くから置いて、特技。特技は鞭と言えば分かるかしら。希望する役職は……出来れば会計がしたいわね」

今の特技の鞭という言葉の意味を知っている僕は心のそこから震え上がった。

「俺の名前も知っているだろう。去年執行員をやっていた山口良だ。特技は力仕事。役職は出来ればまた執行員がいい」

ついに僕だ。山口先輩が時間をくれたおかげで頭の中では原稿が出来上がっている。

「中等部二年の剣由比です。クラスはA組です。特技というか、趣味はアニメ鑑賞と歌を歌うことです。去年、一昨年ともに生徒会長補佐をやっていました。一年間よろしくお願いします」

全員の自己紹介が終わり、赤羽先輩がゴホンと咳払いし、口を開いた。

「さて、じゃあ役職を決めていきましょう。まずは会計から。立候補する人は手をあげて」

鏡君と赤羽先輩が手をあげる。

「……ジャンケンか？」

「そうですね」

山口先輩と矢口が言う。

役職の立候補者が複数いた場合の決め方。それは……ジャンケンである。

グー・チョキ・パーという三つの手を駆使し、相手の心を読みどの手を出すか深く考えその上で勝負する。それがジャンケンの理念

である。

わが白志摩学園生徒会の一番古いノートにはこう書かれている。

『四月二十八日、第一回生徒会役員会議が開かれる。生徒会発足は初の会議で少し緊張した。今日の議題は役職について。役員は立候補して役職を決める。まずは生徒会長から決めた。立候補者は一名。高等部三年の竜崎輝美さんに決まった。次に会計を決めた。会計の立候補者は二人だったので、役職はジャンケンで決めた』

この通り、生徒会発足以来変わることなく受け継がれてきたジャンケンという儀式は適当のようで実はかなり奥が深いものだったりする。

「「……………最初はグー……………ジャンケンはい！」」

先ほどとは大違いの鏡君の熱気に押されてしまった。

結果は赤羽先輩がグー、鏡君もグーであいこ。

「やるわね」

赤羽先輩はこのときばかりはいつもの冷静さを忘れている。

「「あいこで……………シヨッ！」」

二人が同時に手を出す。

「「……………！！！！！！！」」

どちらが勝ったか予想できただろうか。

結果は赤羽先輩が二回連続のグー。鏡君がチヨキだったので、会計は赤羽先輩に決まった。

「甘いわね。ジャンケンで私に勝てると思ったら大間違いよ」

赤羽先輩は嬉しそうに胸を張っている。

鏡君は赤羽先輩とは逆で気を落としている。

「どんまい！」

矢口がかけた言葉も今の鏡君には通用しないようだ。

「さて、次だ。……………次は会長補佐でもいくか？」

「そうですね」

「じゃあ、会長補佐を希望する人、手をあげて」

という赤羽先輩の言葉が耳に入るや否や、僕は手をあげた。

「……ほかにはもういない？ ……じゃあ、生徒会補佐は由比に決定ね」

運良く、僕の希望する生徒会長補佐は誰も立候補しなかった。ラッキーというべきだろう。

「じゃあ、次は書記でも決めましょうか？」

赤羽先輩が言う。

「そうですね。さっさと決めちゃいましょう。ほかにもやらなくてはいけないことがありますし」

「じゃあ、書記をやりたいやつは手をあげる」

山口先輩が言うと同時に二つの手があがる。

一本は希望する役職でも行っていた通り矢口さん。もう一本は時雨先輩だ。

「あっ！」

矢口さんが声を上げる。

「すみません、これくらいしか私に出来そうなこと無いんです」
そう言いたげな顔で時雨先輩は手を上げている。

「ジャンケンだね」

僕は緊迫したこの空気を少しでも和ませようと明るく言う。

「そうですね。先輩」

矢口さんが真顔でいう。

「最初はグー、ジャンケンはい」

矢口さんがグー。時雨先輩がチョキだ。

「やった〜！〜！」

矢口さんが嬉しそうに声を上げる。

対する時雨先輩はものすごく落ち込んでいる。今日の会議の中で立ち直れるだろうか。

「次だな。執行員でも行ってみつか」

さすがというべきだろう。切り替えがめっちゃはやい。

「じゃあ、執行員は俺で」

はいはい。……………まてい！

「ちょっと、先輩。手を上げさせてあげたらどうなんですか？」

「いや、無理だろ。こいつらの落ち込みよう半端ないし」

「それはそうですね。でも」

「じゃあ、いいじゃねえか」

先輩は僕の言葉をさえぎり、小便が漏れるほどの強面で迫ってきた。

「あとの役も適当に決めましょう。この二人が出来そうなことだけど、優君は副会長、時雨さんが生徒会長と言うところかしら」

「そうだな。鏡は全校生徒の一番前に立てるようなやつじゃねえ」
もう、勝手にしてください。

次の日、学校の掲示板には次のようなことが書かれた張り紙がされた。

生徒会新聞！

役職決定！ 次に表記。

生徒会長……………高等部一年 五月雨時雨（女）

生徒会長補佐……………中等部三年 剣由比（男）

副会長……………中等部一年 鏡優（男）

書記……………中等部二年 矢口京（女）

会計……………高等部二年 赤羽香（女）

執行員……………高等部三年 山口良（男）

以上、六名で一年間よろしく。

詳細は次の月曜の全校集会で。

というわけで、現在月曜日の朝八時、白志摩学園体育館、全校生徒千五百六十人が集合し、並んでいる。

僕は生徒たちの前にある幕のかかった舞台で、ほかの役員と準備中。今はクス玉の設置をしている。

「先輩、そこ。もうちょい引つ張って！」と僕。

「こう？」これは時雨先輩。

「違っだろ、由比！そこは緩めだ！」と小声で怒鳴る良先輩。

「すみません」謝る僕。

「出来た？」事務的に赤羽先輩。

『もう少し』みんなでハモる。

もう少しで出来上がる。僕が丸三日かけて作り上げた最高級の作品が！

「でき、まゝしゝた！」

完成だ！ 完璧だ！ もう最強！

「出来ましたね。あとは生徒の反響ですか。結構な作品ですからなかなか受けはいいと思いますよ」

「まあ、この学園じゃあ、歓声とかは出そうに無いけどね」

「そうですね」

ふはははは。生徒たちよ、驚くがいい。この作品に。

「準備はいいですか？ 各ポイントの位置などに問題は？」僕が聞く。

「なかった。なかなかの仕掛けだ。みんな驚くだろうよ」

「ありがとうございます」

よし。準備は整った。あとは割るだけ。

「幕上げるよ」。いい？」

『オッケー』

僕らのオッケーと同時に幕が上がり始める。

そして、幕が完全に上がると同時に矢口さんの声。

『全校生徒、全員起立！……中等部二 C さつさと立て。十秒以内！早く立て！……いいか！じゃあ、これより第一回全校集会を始める！礼！着席！』

相変わらずだ。彼女はマイクを持つと人が変わる。

「相変わらずですね。どうやればあんなに人が変わるんでしょう」

隣にいた赤羽先輩に聞く。

「分からないわよ。あと、マイク持った彼女に逆らわないほうがいいわね。前に一度文句を言ったら耳元で絶叫されちゃった」

「絶叫て……………」

「ただけ！」

『それではー、役員の紹介も終わったところで、一言挨拶だ！　まず会長から！』

というと、彼女は自分の持っていたマイクを今年度会長の時雨先輩に渡す。

時雨先輩はマイクを受け取ると、ゆっくりと舞台の中心へ向かい、呼吸を整えると、一度全校生徒を見渡し言った。

『今年度会長になった、高等部一年の五月雨時雨です。一年間皆様の学業に支障が出ないよう一生懸命頑張りたいと思います』

その声は、凜とした、聞くものに緊張感と安らぎを与える、そんな声だった。

『次！　会長補佐！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9677l/>

白志摩学園生徒会！！

2010年10月12日04時34分発行